

## 「幸せ社会の実現に向けて、日ごろの営みから」

この世の中、満ち足りた豊かさの中にも格差拡大とか、弱者へのしわよせ、とかいった社会問題があり、また人間的な問題としては、人間関係の希薄化とか、効率重視による人間性の軽視とかいったことがある。しかも、後者については昔では考えられなかったことが今当たり前ようになってきている。そんな世の中では、ハードやソフトからの施策に加えてヒューマンウェアとしての施策が福祉の施策と思っている。

そんな観点で世相を展望すると、一断面が大変気にかかってくる。例えば高齢者は家族にも地域にも自分を殺してまでも遠慮といった偏ったかかわりが見られている。また普通の方々（健常者、若者・中堅など）はどんな意識かといえば、弱者と呼ばれる方々と訳隔てなく交流や関連があるかといえば日常的には無いといえる。そんな状況下では市民には、弱者施設ひとつとっても自分らとは別の世界といった捉え方がどうしても出てくる。そんな意識が皆さんにふれあいとか、思いやりとかいったところでも、頭で理解しているだけに過ぎないともいえる。

こう考えると、我ら市民のやるべき行動が見えてくる。市民にとっては、福祉の専門家の方々の応援や協力はもちろんのこと、社会の構成員として市民だからできることがある。後者について以下に列挙したい。

(1) あたりまえのことをあたりまえに。子どもには挨拶しようっていつているのに、大人同士、声かけを積極的に押しすすめるべきである。そのためには、街中を車でなく歩きましょう。買い物でも何でも。さすれば、街が屋根のない大きな社会施設ということになると思う。

(2) 気遣いのまえに健康行動を。体をまめに動かし、健康年齢を伸ばすということである。これには笑いとよりそいが一番と思う。こうしたことが世の中のギスギス感を和らげていく。

そんな意識を各自が持って街に粋に住みたいものであり、日常生活を健全にしたいものである。さすれば、人間関係を人間味あるものに、やさしさ、いつくしみ、などの感覚が自然と生まれると思う。今一度いうと、人と人の距離が短く顔のみえる街、笑い声がこだまする街、人の息遣いが分かる待ち、そんな街を意識して住まおうというものがある。こうした市民行動がきっかけに、学校でもそんな観点からの協働があり、行政への施策へと展開していくものと考えられる。